



里海学びの講座 (全3回) 開催しました!



第1回「森と海のつながり」

日時: 平成29年5月19日(金)

18:30~20:30

会場: 香川大学 研究交流棟6階
第一講義室

講師: 増田 拓朗 氏 (香川大学名誉教授)



第2回「川と海のつながり」

日時: 平成29年6月2日(金)

18:30~20:30

会場: 香川大学 研究交流棟6階
第一講義室

講師: 石塚 正秀 氏 (香川大学工学部准教授)



第3回「藻場造成と里海づくり」

日時: 平成29年6月16日(金)

18:30~20:30

会場: 香川大学 研究交流棟6階
第一講義室

講師: 末永 慶寛 氏 (香川大学工学部教授)

今回の里海学びの講座では、「山」「川」「海」それぞれの視点からの環境・資源保全の研究事例を通して、水の流れを介した「海とのつながり」について、3回の講座が開かれました。

第1回「森と海のつながり」

5月19日に、里海学びの講座の第1回を開講しました。

はじめに、香川県環境管理課の職員から、「里海づくり概論」と題して、スライドを用いて解説が行われ、香川の里海の特徴や里海が抱える問題などについて解説がありました。

つづいて、香川大学名誉教授である、増田拓朗氏により、「森と海のつながり」をテーマに講義が行なわれました。



本日、お話しする内容

1. 森と海のつながり
事例 (大分、えりも岬、気仙沼)
2. 海における物質生産
物質生産 (光合成) に必要な物
3. 森林のもつ水土保全機能
洪水調節機能、土砂流出防止機能、
水源涵養機能、……



一見、無関係にも思える森と海は、実は密接な関係があることを、日本や世界各地の事例を用いて解説がありました。

植物の生育についての科学的な要素についての説明では、香川のノリの色落ちなどを例に、植物の生育のために必要な要素は、川を通じて流れ込む森の状態に大きく起因していることが解説されました。

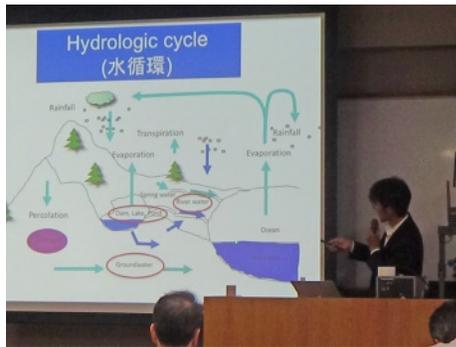
森を大切にしないと、海は生きていけないという漁業を営む先人たちの経験則は、科学的にも裏付けのあるものだったというお話もありました。

第2回「川と海のつながり」

6月2日に、里海学びの講座の第2回を開講しました。この日は香川大学工学部准教授の石塚正秀氏により、「川と海のつながり」をテーマに講義が行なわれました。

講義ではまず、「川」のもつ役割に関して講師より問いかけがありました。川はどんなところを通って、どんなものを運んでいるか、普段何気なく目にしてはいる川も、改めて考えるとその役割は知らないものです。

香川県と兵庫県の川の違いを例に、流域の面積の違いにより、川に集まる水の量が変わり、瀬戸内海に流れ込む水の量も川ごとによって変わってくるといった話がありました。



次にBOD(生物化学的酸素要求量)やCOD(化学的酸素要求量)といった水質汚濁指標から見た近代の河川や海の水質の変化について解説がありました。また、水環境に関する法律や政策の歴史について話がありました。

生活や産業など、様々なところから排出される水に含まれる負荷には様々な成分があります。法律に基づく規制の効果でその負荷の総量が減少し、水質の改善が見られる一方で、ノリの色落ちやカキの不作といった、新たな問題も出ていることが解説されました。

第3回「藻場造成と里海づくり」

6月16日に、里海学びの講座の第3回を開講しました。この日は香川大学工学部教授の末永慶寛氏により、「藻場形成と里海づくり」をテーマに講義が行なわれました。

水質の浄化や、水生生物の生息の場として大切な「藻場」。しかし現在は藻場が減少しており、様々な問題が出てきています。

末永先生の研究は、養殖業などで廃棄物として出る魚の骨を有効利用するものです。このHAP(ヒドロキシアパタイト)と呼ばれる成分は、有害金属を吸着する作用があるそうです。



この素材を用いて作られたブロックを海に沈めると、海藻などが根付いて、稚魚の隠れ場所になり、海の生き物の生息に適した場所となりました。このブロックは取り外せる突起部分があり、そこに生育した海藻にダメージを与えることなく突起ごと移動ができるという工夫もされています。

今後もHAPの様々な活用法を検討されており、大きな期待と希望を持たせてくれるお話でした。